二千九百九十九番目の物語

デス＝クトップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二千九百九十九番目の物語

【Ｎコード】
Ｎ４６３４Ｚ

【作者名】
デス＝クトップ

【あらすじ】
現代ファンタジーの皮をかぶった異世界ファンタジーです。
見所は、キモチワルイ主人公、無駄な足掻きをするキャラクター達、もはや記号と化したヒロイン群、といったところです。うそです。
見所は、目新しい気がしなくもない世界観といったところです。
緩く連載していくので、どうぞお付き合いください。

ある聖職者の手記から抜粋

滅びは約束されている。
三千世界を作り出したウーヌスがそう言い残したという事実に、異議を唱える宗教家はいないだろう。
もちろんその滅びが何を意味しているのかについては、意見が分かれるところではあるだろうが。
私見を述べさせてもらうとするなら、

〜中略〜

ウーヌスは遍く三千世界のすべての事象を予見していた。
世界も、時間も、そして命も超越した存在であるのだから、それは当然かもしれない。
そのウーヌスが滅びを約束したというのならば、我々人間ごときがそれに抗うことは不可能なのだろうか。無意味なのだろうか。
私はそうは思わない。
何故なら、

〜後略〜

序幕

そして気がつけばまた体が十二年ほど若返っていた。
ハッピーエンドは難しい。

＊＊＊

その日発売されているはずの週刊少年誌を立ち読みしようと思っただけだった。最寄りのコンビニエンスストアは家から歩いて五分ほど。目をつぶっていたってたどり着けるほどに歩きなれた道だ。
だからそれはほんの偶然。
突然強い風が吹いたのも偶然。
僕の隣を歩いていた男の人が持っていた書類をバサバサと落としたのも偶然。
それを横目でチラリと見た僕の目が、その向こうに路地裏を捕えたのも偶然。
だから、その暗がりに僕の目が釘付けになったのはただの偶然に過ぎなかった。
そんなところにこんな細い道があるだなんて。長い間この町に住んでいるが、意識したことはなかったと思う。ましてそこに足を踏み入れようなんて。
一言で表すなら。
違和感。
もしくは期待。

戯れに求めたものとはいえ杳としてつかめないこの物語の結末、
それにつながる何かがあるような気がして。
そして僕は初めてこの日にそこに入った。
そして僕は初めて彼女に出会った。
彼女はいつでもここにいたのだろうか。
僕はそんなことを考えていた。

第一幕　前

七曲町（ななまがりちょう）には、中等学校は一つしかない。七曲中等学校。そのまんまだ。何のひねりもない。さらに初等学校名も七曲初等学校なのだから救われない。救いがたい。……とは言え、この名前は誰がつけているのだと聞かれれば、歴史と伝統をことさら大事にしているここ極東行政区画のお偉方なのだから、面白い名前を期待する方が間違っているのかもしれない。

七曲中等学校に入学して一年と二か月。ちょうど三百三十三回目となるそんな思考をなぞりつつ、僕はトレイを片手に取った。

コの字型の校舎の中庭に面した食堂、現在時刻は午後三時二十分。つまり放課後である。昼休みにはさながら飢えたイナゴのように人がごった返すこの場所も、それから三時間弱過ぎただけでこの通り。人気のかけらもない。快適だ。食堂自体は部活に精を出す連中のために完全下校時刻直前までやっているのだ。入学した僕が初めて昼休みの食堂の惨状を見た時、三時間の空腹くらい我慢しようと、そう結論を下すのは当然のことだった。

さて、今日は何を食べようか。

長時間のお預けをくらった僕の胃袋は、先ほどから「早く食い物をよこせよこせ」と不満と催促の大合唱をしている。それも当然で、昨日の夜はちょっとした面倒事をかたづけていたため夕飯を口にしてはいないのだ。当然朝食なんて上等なものを食べる習慣は持っていないので、実はおよそ二十四時間ぶりの食事だったりする。

そうなってくるとここは豪勢にC定食なんていってみたい気もするが、これからのことを考えるとあまり金を放出しない方がいい気もしてくる。月末にパンの耳をかじって飢えを凌ぎつつ奨学金を待つ生活はもう御免なのだ。

「……というわけで、定食系は諦めるか」

後ろ髪をひかれながら、僕は隣の麺類コーナーへと足を向けた。

豪勢プランをあきらめたとはいえ、僕が今現在常日頃にないほどカロリーを欲していることに変わりはない。つまり目的は質より量プランである。

麺類コーナーでしばらく天井付近の壁に引っかかった赤い札、つまりメニューを睨みつけた僕は、「素うどん三つで」と注文した。受けたおばちゃんは不審そうに食堂を見渡した後、何も言わずに三つのどんぶりを出してくれた。どうでもいいが、パシリにされたとでも思ったんだろうか。一日に七百食以上もの注文をさばくおばちゃんをもってしても、一人で素うどん三つというのは珍しいようだ。

トレイいっぱいに三つのどんぶりを無理やりのせて支払いを済ませる。素うどん三杯で五百四十円。C定食が六百三十円であることを考えると、素晴らしいコストパフォーマンスだ。

僕は満足してひとつ頷くと、麺類コーナーから程近い食堂の片隅の席に座った。

「いただきます」

小さくそう呟く。習慣というものは、いつまでたっても抜けないものだ。

当たり前だけど食前の祈りは唱えない。

割り箸を手に、まず一口すする。

うん、うまい。

空腹時に食べる食事は、どうしてこんなにうまいのだろう。この分だとどんぶり三杯の素うどん、案外おいしく食べ切れるかもしれない。麺だけならばともかく、こっちには刻み葱もついているのだ。この白と緑のコントラストの美しさを見てみるといい。

時間が経つにつれ麺が伸びてまずくなっていくうどんの性質から目を背けて、僕はただ一心にすすり続けた。

そして。

「や、どうも～」

どんぶりにのみ意識を傾けていた僕の前に彼女が座ったのは、ちょうど一杯目を半分ほど消化し終えたかどうか、といった時だった。

「ちょろっとごめんね～」
言って割り箸に手を伸ばす彼女の前にはC定食、さらにはデザートに杏仁豆腐までついている。周りを見回すが、空いている席はいくらでもある。むしろ食堂内にいる人間は僕と目の前の彼女、そして暇そうにぼんやりしている食堂のおばちゃんだけである。
何だこの子。
もしかして素うどんをすすっている僕に対して豪勢な食事を自慢でもしたいんだろうか、という僕の予想は、「偉大なる神ウーヌス、ドゥオ、そしてその五柱の子供たちよ。今日も私に与えたもうたささやかな糧に感謝いたします」という彼女の唱える食前の定型文によって強化された。
C定食に杏仁豆腐がささやか、だと？　嫌味だろうか、この女郎。
メメラッと燃えそうになった僕の怒りは、しかし「わ！　何そのメニュー！」と、如何にも今気づいたと言わんばかりの大げさな彼女のアクションによって封殺された。
「おうどんが三つだけなんて見たことも聞いたこともないよ！　しかも具なし！　どうしたの？　何かのおまじない中？」
面白いモノ見つけた、と全力全開で訴えかけるその笑顔をまじまじと眺める。
変に馴れ馴れしいのが気になるけど、初対面だと思う。
少し低めの鼻に小さめの口、クリンと丸い目は笑顔の見本カタログのように輝いている。赤茶色の髪の毛は首の後ろにかかるくらいのショートカット。背の高さはどのくらいだろう。座っているのでよく分からないが、僕と同じくらい。つまり一メートル六十をほんの少し超えるくらいだと思う。制服のタイの色から僕と同学年、二年生だと分かるが、それにしてはえらく童顔な女の子だった。
間違いなく、全く見覚えのない子だ。
「えーっと……見つめられるのはいいんだけど、何か反応が欲しかったり……」
黙ったままただ見つめている僕の視線に耐えかねたのか、その子

は少し困ったように眉根を寄せておずおずと言った。
「あー……」一瞬何と言っていいか悩む。「君、誰？」
結局あきらめて、僕は率直にそう尋ねた。初対面の人間にわざわざ話しかけるということは何か用があるということに違いないし、何か言って追い払うよりもうどんを食べる間くらいなら話に付き合った方が手間も省けると思ったのだ。
しかしそれに対して、彼女は心底心外だと言うように口をへの字に曲げ、両腕を振り上げた。
「ちょ、ちょっと！　本気で？」
ん？
慌てたようなその反応。ピンとくる。どうやら彼女は僕のことを知っているらしい。そして当然僕も彼女のことを知っているものだと思っていたみたいだ。
「私だよ！　私！　紀国歩（きのくにあゆみ）！　さっきまでおんなじ教室、しかも隣の席で授業受けてたじゃないの！」
目を三角にして肩を怒らせる彼女は、どうやら僕のクラスメートらしい。如何にも気分を害しましたとばかりに口をとがらせている。見たところおそらく本気で怒っているわけじゃなく、そういうポーズをしている部分もあるんだろうけど。
まあ何にせよ、こういう場合に僕が返す答えは決まっている。
「ごめん。僕、健忘症の気があるんだよ」
定型文を口先に乗せて、僕は申し訳程度に頭を下げた。

どうやら彼女は去年一年間も僕のクラスメートだったらしく、その分まで含めてしばらく機嫌を低空にて彷徨わせていた。が、どうも彼女は怒りを長続きさせられないタイプのようで、僕が素うどんの二杯目に取り掛かる頃には、何事もなかったかのようにタルタルソースの乗っかったエビフライをぱくついていた。
「うーん、相変わらずこのエビフリャーは絶品だよ！」
まるで僕に見せつけるように食べている、というのはうどんの味

に飽きてきた僻み根性が見せる偏見だろうか。二杯目のうどんに取り掛かった僕は、悪あがきのように刻みねぎをまんべんなく散らした。

「いやぁ～、それにしてもまさか名前も顔も覚えられてないなんてねぇ～。確かに直接お話ししたことはなかったとは思うけどさぁ。一年以上おんなじ教室で切磋琢磨したってのに。これはイジョーだよ、イジョー。歩ちゃん、カナシ―なぁ」

文句を言いつつも屈託なく笑う彼女は、きっといい人なんだろう。普通自分の存在を忘れていた人間の前では、こうも笑っていられないものだ。

「それに関しては謝るよ」

「……う～ん、別にヨウ君に悪気があったわけじゃないってのは分かってるんだけどね。というか、そう。あれだよ、あれ。前々から思っていたんだけど今日歩ちゃんは確信したね。ヨウ君はもっとクラスメートとのコミュニケーションを大事にすべきだよ。私ヨウ君が授業で指名された時以外に話してるの、見たことないもん。違う？　この学校で誰かとおしゃべりしたこと、ある？」

そんなことはいちいち覚えていないけど、彼女がそう言うのならそうなのかもしれない。少なくとも現在僕の脳内に誰かと話している自分の姿は浮かんでこない。もっともそういったことに関する僕の記憶力は、パリパリに乾いた犬のうんこ並みにあてにならないので何とも言えないのだけれど。

二秒ほど頭をひねってから結局面倒になって、僕は「どうだったかな」なんて玉虫色の答えを返した。

「それで？　わざわざそんなことを言うために僕の前に座ったわけじゃないんだろ？　用件は何なのさ？」

「はい！　それだよ、それ！」

なぜか鬼の首を取ったかのように彼女はテーブルを二度、バシンバシンと引っ叩いた。

「さっさと私の用事を済ませて話を切り上げようって意図が明け透

けすぎるよ！！　無駄話しようよ！　もっと人生に余計な彩りを添えようよ！」
話題提供カモーンと待ち構える彼女を見て、僕は内心ため息を吐いた。彼女曰く同級生との会話経験が一度もないような僕が、気の利いた話なんて振れはずもなく、またそのつもりもあんまりないのだ。
「……君、エビフライ好きなの？」まあ、これが僕の精一杯だ。
幸い彼女はそれで満足したらしい。
「うんっ！　大好きだよっ！　ここのエビフリャーは美味しいしね。ちょっと食べてみる？」
「いや、いらないよ」
「そかそか。ちなみにヨウ君は好きな食べ物とかってあるのかな？」
「どうかな。好きな食べ物はすぐには思いつかない。今食べたくないものなら決まっているけど」
「へへん、私分かるよ。おうどん、でしょ？」
正解だ。
舌がおかしくなったのか、さっきから何の味覚も伝わってこない。白い紐をすすり続ける機械になったような気さえしてくる。僕は一体いつからうどんをすすっているのだったろう。
いささか回りの悪くなってきた頭を振って、僕は三杯目のうどんに取り掛かった。
「ていうかどうしておうどん三つも食べてるの？」
「お腹空いてたんだよ」
「だったらおうどん三つじゃなくてもっとこう……」
「お金がないんだよ」
ベルトコンベアに乗せたような行先の決まりきった会話に、彼女はしばし何事か考えこんだ後、
「あのね、これはヒトリゴトなんだけどね。……私、こう見えてお料理作るのケッコー得意なんだよね。それでね。もしヨウ君さえよかったら歩ちゃん、明日にでもお弁当作ってきちゃったりするつも

りらしいんだけど……どうかな？」おずおずと質問を投げてきた。
何のつもりかと内心頭を傾げる。彼女によると僕は一年余りを共に過ごしたクラスメートらしいが、それもろくに会話もしなかった程度の関係だ。そんな人間がいくらさもしい食事をしていたからと言って、わざわざ弁当を作ってくれるなんて。無条件でそんな都合のいい話を信じられるほど僕の脳みそは干からびていない。
「それはうれしいけど、僕は代わりに何をすればいいのさ」
つまり交換条件を持ちかけられたってことだろうな。弁当作ってきてやるから私の用事に付き合ってもらおうか、ってところか。報酬を先にちらつかせてから交渉に入るなんて、見かけによらずずいぶんと計算高い子のようだ。
その意図を見破られた彼女は、ほんの少し顔をひきつらせた。
「えーっと、代わりに何をって。そんなつもりじゃなかったんだけどなぁ……。まあいいやっ。それじゃあね……、う～んっと、う～んっと、それじゃ、今度の休日に二人で遊びに行こうってのはどうかな？」
「ん……」
一瞬言葉に詰まってしまう。
「今度の休みか……」
と考え込んだ僕の姿に何を思ったのか、彼女はわたわたと手を振って、
「あ！　何か用事があるんだったらいいんだよ！　言ってみただけだから。うん、言ってみただけ。ヨウ君が普段どんな遊びをしてるのか、なんてちょっと気になっちゃったりしただけだからっ！」
そうフォローをいれた。
「用事ってわけじゃないけどさ」
「ないけど……？」
「うん。まあつまり。しばらくの間、ちょっと忙しくなるかもしれないんだよ」
お茶を濁す僕に彼女は納得していないようだったが、口をつぐん

だままうどんをすする僕の姿を見て、どうやらそれ以上話は聞けない雰囲気を察したらしい。彼女は「そうなんだ」と追求するのをあきらめた。
「悪いね」
言って最後に残ったうどん出汁を飲み込むと、僕は席を立った。
「ごちそうさま。……それじゃ、また」
「ええ？　嘘！　行っちゃうの？」
素っ頓狂な大声をあげた彼女は、箸でつまんでいたコロッケのかけらを放り出して、トレイを両手に食器返却口へ行こうとする僕の腕にすがりついた。
「ちょっとっとっ！　待って待って！　もうちょっとだけお話に付き合ってってば！　明日のお弁当の事とか他にも色々と聞きたいことがあるんだよぅ！」
意外と力が強い。最初からそのつもりもないけど、振りほどくこともできない。結局僕は引きずられるまま、元の席に着くことになった。
「一緒にご飯食べてたのに放置されそうになるなんてまさかまさかだよ！　ヨウ君ツメタイ！　ツメタスギだよ！　新種の杉でも発見したのかよってツッコんじゃうくらいのツメタスギだよっ！」
憤懣やるかたなしといった様子の彼女は、自棄になったように白米をかきこんでいる。全くもって理不尽な怒りだ。しかも意味が分からない。
僕はため息を吐いて我が身の不運を呪った後、彼女に尋ねた。
「それで？」
「何だよ何だよ！　私の事なんてドーセドーセ！　ムキー！」
聞こえちゃいない。
このままソッと帰っても気づかれないような気もしたが、そんなことをすれば明日はもっと面倒なことになるのは確実だ。心の中でもう一度ため息を吐いて、僕は少し待つことにした。さっきの様子からして、彼女の怒りはすぐにおさまるだろうし。

という僕の予想通り、彼女の眉と地面の織り成す角度が鈍角に落ち着いたのはそれから三十秒もたたないうちの事だった。
「それで。聞きたいことって何なのさ？」
早速とばかりに切り出した僕の前で、彼女は肩を落とした。
「うううぅ……。なんだろう、すごい敗北感だよぅ」
「敗北感？」
「ハァ……。ううん。何でもないんだよ。うん。気にしないで、大丈夫だから。……とりあえず、そうだ。メイワクってわけじゃなさそうだし、お弁当は明日作ってくることにするよっ。うん、決めた。だからね、えっと、その代わりに歩ちゃんの独占取材に付き合ってもらうってそんなコウカンジョウケンはヨウ君的に……アリかな？
ナシかな？」
「取材？」
また変な言葉が飛び出してきたと、思わず聞き返した僕に対して、待ってましたとばかりに彼女は食いついた。
「うん、レッツ取材だよ！　ヨウ君は知らないかもだけど、歩ちゃんは新聞部不動のエースなのだよ！　これでも去年は一年生にして七曲中等学校新聞の一面を飾った回数、我が部内でぶっちぎりの一番手だったんだから！」
「すごいでしょ！」と胸を張る彼女だったが、そもそも僕は七曲中等学校新聞なるものの存在すら今知ったので何とも言えない。とりあえず、「ふーん」と相槌を打っておく。
「と、いうわけでヨウ君にゼヒゼヒ取材したいところなんだけど、いいかなっ？」
「……答えられないことは答えないけど、それでも構わないなら」
曖昧な僕の答えに「ヨーシッ！」と彼女は腕まくり。トレイを横に寄せて、どこからかメモとペンを取り出した。この間わずかコンマ二秒。新聞部不動のエースの名は伊達ではないらしい。
「ではでは！　まず最初の質問からね！　ん～っと……ヨウ君の名字の海月なんだけどね？　海月って……もしかしてあの『海月』？」

あの『海月』とは何のことか。なんて無駄なことは聞かない。この極東行政区画において、いや、間違いなくこの世界において、『海月』というのは特別な意味を持っているからだ。

この世界。

そう、この世界だ。

ご存じのとおり、ウーヌスとドゥオの作り上げた三千世界の一つ。

それがこの世界。

この世界は一つの大陸と、その少し東に浮かぶ弓状の列島。そしてそれを取り囲む大洋によって構成されている。世界の形はおよそ直径二万キロメートルの球状。そのうち僕たちが普段目にしているのは地面および海面から上の半球、つまりはドーム型の世界だ。底面全体、およそ三億平方キロメートルの四分の一ほどの広さの大陸、および大陸の十分の一ほどの広さの弓状列島は、その真ん中に鎮座している。球の外側に何があるのか。また、空に映る太陽や月、星々の輝きは一体何なのか。それを考えることは、この世界の人間には許されてはいない。

そんな世界（ものがたり）に僕らは生きている。

こんなこと、この世界に住んでいる人間なら箸も使えないような歳の幼児でさえ知っている常識ってやつだ。

「あの『海月』というのが、七百年前にいた海月桔梗の『海月』を言ってるんならその通り。僕は彼女の遠い子孫ってやつだね」

頬杖ついてそう返した僕に、彼女は目を輝かせた。さもありなん。極東行政区画に住む人間にとって、海月桔梗というのはいわゆる英雄の名前というやつなのだ。

三魔と呼ばれる魔物がいる。人類史上、特に危険とされた三人の魔のことだ。他の魔物とは一線を画すその力、脅威。たった一人で人類を滅ぼしかねない魔物に与えられる名が『三魔』ということらしい。そのうちの一人が七百年ちょっと前に、当時はまだ東部行政区画の一部に過ぎなかったこの弓状列島に現れた。東部行政区画の心臓部は今も昔も大陸の内陸部にあり、そのため列島で暴れるこの

魔への対処が遅れ、あわや列島全滅か。という時に現れたのが海月桔梗。仲間もおらず、武器も持たない。そんなか弱い一人の人間が列島を救ったと伝えられている。さらにこの件をきっかけに列島内部にもう一つの行政機関が設立され、中央神殿より極東行政区画の名前が与えられた、というわけだ。もちろんその『海月』は極東行政区画成立当初より、政治、経済、そしてもちろん退魔。あらゆる分野の中心に根を張っている。

うん、海月桔梗。まさに英雄だ。

「やったやったやったよ！　すごいすごい！　やっぱり歩センセーの目は確かでした！　一目見た時からヨウ君はタダ者じゃないって、ワタクシそう信じておりましたとも！　みんなから白い目で見られながらもヨウ君タダ者じゃない説を唱え続けて苦節四百日！　今まさに歩センセーの努力は実を結んだのですっ！」

だから彼女のこのハイテンションもまあ、不思議ではない。

何やら失礼なことを言われているが流すことにする。というか、目の前の彼女が腕をぶんぶん振り回すので、危なくてしょうがない。

「それでそれで？　あの『海月』の一員であるヨウ君が、どうしてこんなひなびた町のこんなひなびた学校に通っているのかな？　トクシュニンム？　センニューソーサ？　ハカイコーサク？　それともそれとも、もしかしてこの町に何かヤバげな魔物でも潜伏してるとかかなっ？　それってそれって大変だよね？　この町のピンチってやつ？　何か私に手伝えることがあったらいいんだけど、どうかな？　そうだ！　この際だから二つ目の質問もいっちゃうけど、三日前の湾岸工業区画の三十七番倉庫爆発事故は魔物の仕業だったり？　もうもう三つ目いっちゃおうか！　昨日の夜ヨウ君がボロ布まとった女の人背負ってるとこ見ちゃったんだけど、これって何かカンケーあったりするのっ？」

彼女の興奮は止まらない。というかやかましい。しかも最後の質問は聞き捨てならない。例の女性を家に運び込むまでのほんの十分余りの間に、その現場を見られていたとは予想外だ。しかもそれが

同じ学校の同じクラスの女の子だっていうんだから、何やら作為的なものを感じる。
どういうことだろう、と頭を悩ませ。しかしすぐに思考を放棄した。
所詮は些末事だ。
枝葉末節極まれり。
ほんとにね。
不毛。
「期待に応えられなくて悪いけど、僕はもう『海月』とは関係ないよ。十年以上前に家を出されたからね」
だけど僕は正直に答えることにした。
些末事に過ぎなくてもほんの十分間の偶然に遭遇したこの子の運命は、面白いかもしれないから。
この世界にいい花を添えてくれる存在になるかもしれないから。
だから僕は正直に答えることにした。
背を伸ばし、初めて彼女の目を見つめる。
「だから僕がこの町に住んでいるのにもこの学校に通っているのにも『海月』は関係ない。もちろん魔物の影なんて知らない。三日前の湾岸工業区画の三十七番倉庫爆発事故だっけ？　そんなこと今初めて聞いたし、昨日のあれだって、ほんとにただの偶然だよ。道で意識を失って倒れていた女の人を介抱するために運んでいただけ。僕の同居人にそういうの、得意な人がいるから。なんだか訳ありっぽかったし、事情を聞くまでは病院に連れて行かない方がいいかと思って。ただそれだけの事だよ」
そこまで言って、僕は一度水で唇を湿らせた。
少し話し過ぎた気もする。
だけど嘘はついていない。
一つとして、嘘はない。
一息ついて、僕は目の前の彼女の様子を窺ってみた。彼女は何やら気落ちしているみたいだった。それが『海月』と僕がつながって

いないという期待外れによるものなのか、それともまた別の要因があるのかは、神ならぬ僕には分からないけど。
「え、えっと。……まずはその、ゴメンナサイ。ひどい事聞いちゃって」
しばらくして頭の中身を整理し終えた彼女は、そう言ってペコリと頭を下げた。彼女が一体どの質問に対して罪悪感を持ったのかは分からなかったが、わざわざ聞くのも面倒な僕はただ黙って顎を引いた。
「その女の人は、えっと……どうなったの？」
うって変わっておずおずと聞いてくる彼女は、本当に堪えているようだった。怒りはすぐに忘れても、こういう感情は簡単に流せないらしい。損な性分だ。
「今朝家を出るときには、まだ目を覚まして無かったよ。まあ身体的には何の問題もないそうだから、心配はいらないと思うけどね」
「うん」
「そんなわけで、これから少し忙しくなるかもしれないってわけ」
「うん……そっか。うん。……うん。分かったよ。もう大丈夫。大丈夫。よし、大変みたいだしょうがないよね。そうだ、私にできることがあったら何でも頼ってね。さっきも言ったけれど、私料理にはちょっと自信アリアリだからさ！」
そう言って、少しぎこちないけれど彼女はしっかりと笑ってみせた。
「それじゃ一つ質問、いいかな？」
「うん？　何だい何だい？　歩センセーに何でも聞いてみたまえ！」
「三日前の事故って、何か不自然なことでもあったの？」
彼女が魔に関係あると睨んだその事故。その理由が何なのかは、ほんの少し気になった。
些末事にも満たないことだけど、なぜか。
そう、なぜか気になった。
「う～ん……そう来ますか……」彼女は少し困ったようにそう唸り、

「なんていうかね、何にも分からないの」
「と、言うと？」
「えっとね、えっとね。そんなに大した爆発事故じゃなかったのは確かなんだよ。警察庁も消防庁もすぐに帰っちゃうくらいの。もちろん退魔庁なんて影も形も見当たらなくって。普通だったらそういう場合って、原因は何なのか、とか被害状況はどうなのか、とかすぐに分かっちゃうんだけどね。えっと。なんでかって言うと、隠す人がいないから。そんなちっちゃな事件をわざわざ隠す人、いないもんね。だけど三日前の事故は……」
「誰かが何かを隠してるってこと？」
「ううん！　違うのっ！　誰かが隠し事してるかなんて、そんなこと私には全然わかんないけど、でもでも事件のことが何も見えてこないのは確かで。それで……何ていうかちょっと変だなって。ただそれだけ」
彼女は困ったように眉をハの字にさせた。
なるほど。それは確かに面白い、かもしれない。つまらない小さな事故が、なぜか隠されている、かもしれない。確かなことは何一つないけれど、何。その方が僕好みの展開だ。
知らず、僕は笑っていた。
「ありがとう。楽しい話が聞けたよ」
今度こそ僕は席を立った。
「あ！　ちょっとちょっと！　あのあの、調べるんだったら優秀なガイド兼情報収集役がここにいるよっ！　今なら大安売り！」
胸を張って自分を指差す彼女。
「ああ、うん。何かあったら手伝ってもらうよ。たぶん、おそらく、きっと」
「そんなこと言って！　ぜーったいに私の事なんか忘れちゃうんだからダメッ！　ヨウ君のことなら、歩ちゃんは何でもお見通しなんだからねっ！　だから、えっと。……そうだ！　携帯端末もってる？　番号交換で連絡取るようにしよっ！　三日前の事故についての

情報共有義務化条約！　はい、テイケツテイケツ！」
彼女はポケットからゴテゴテとストラップをつけた携帯端末を取り出して、何やら操作を始めた。
「じゃあね、こっちからかけるからヨウ君、番号をどうぞっ！」
「えっと確か……」
曖昧な記憶のままに番号を伝えたが、どうやら正解だったらしい。
僕のポケットから軽快な電子音が流れてきた。
「よしっと！　……えへへへへ。これでいつでもお話しできるねっ！
それじゃ、登録しておいてね。あ、あと爆発事故の調査、一緒に頑張ろうねっ！　それとそれと……そうだ！　今日は付き合ってくれてどうもありがとう！」
大きく手を振る彼女に背を向けて、僕は返却口へと歩を進めようとして、
「あ、そうだ！　最後にイッコいいかなっ？」
仕方なく振り返った僕に対して彼女が投げた質問は、
「えっと。ヨウ君がね、おうどん食べ終わった時に言ってた『ごちそうさま』って、どういう意味かなっ？」
僕の返した答えは、ここでは語らない。
どちらにしても些末事だ。
ほんとにね。

第一幕　中

校門から外に出た僕がまず足を向けたのは、自宅の方角ではなく湾岸方面だった。
気になったことはすぐに確認せずにはいられないこの性格は、ずいぶん前に矯正するのをあきらめている。
原因不明の不自然な爆発事故。そんなもの今までいくらでもスルーしてきたっていうのに。
ほんと、不毛だ。
かもしれない。
でも、
違うかもしれない。
「まあ、何のとっかかりも無い状況だからいいんだけど」
負け惜しみのようにそう一人ごちて、僕は赤信号を前に足を止めポケットから携帯端末を取り出した。登録住所一覧から自宅を選択し決定。端末を耳に押し当ててコール音を聞くこと三回。信号が青に変わると同時に繋がった。
『はい、もしもし。海月です』
聞こえてきたのは女性の透き通った声。義妹の方だ。
「僕だけど」
『ヨウ？』
「うん」
『どうしたのですか？　帰りが遅くなるのですか？』
その通り。
まあ、いつもならもう帰宅している時間に電話をかけたんだから、それ以外の用事はありえないのだけど。
「ん、ちょっとね。調べたいことができたんだ。ま、日が暮れるまでには帰るから」
『分かりました』

「……それで、昨日の彼女だけど。どうしてる？」
少し声を落とす。
別に他人に聞かれて困る話じゃないと思うけど、こういうのは気分の問題だ。
『それなのですが……』
それに答える彼女、マリー・ブラフォードの声も、心持ち潜められた。どうやらあの行き倒れはまだ目を覚ましていないらしい。
『何度か意識を取り戻すそぶりは見せているので、今日明日中には目を覚ますと思います』
「ふーん。……で、素性の方はもちろん……」
『はい、不明です。身分証明のようなものは何一つ持っていませんし……外見から推測して列島出身の女性だとは思うのですが』
それも確かではない、と。
まあ、答えの出ない問題をあれこれ考えていても仕方がない。ひとまず彼女のことは頭から追い出すことにする。
「ま、その辺のことも意識が回復したら聞けばいいか」
『はい。今のところ自宅周辺をうろつく怪しい影はいないと義兄も言っていますので、どうも彼女は荒事関係の人間ではないかもしれません。いずれにせよ、今すぐどうこうなるというわけではなさそうです』
……それは、何とも。
期待外れ。
「ふーん」
いっそのこと外に放り出してやろうか。と、思わず浮かんでしまった考えを追い出す。
結論を出すのはまだ早い。
「まあいいや。とりあえず引き続き頼むよ」
『はい。……何をなさるのかは聞きませんが、お気をつけて』
「お互いに」
それで通話は終了した。電源ボタンをワンプッシュして端末をポ

ケットに放り込む。気がつけば風に潮の香りが混ざっていた。前方に海が見え隠れする。今日は天気がいいので、その向こうに大陸の姿がぼんやりと映っている。珍しい。そういえば列島から大陸の影を見ることができたら、その日はいいことがある。なんていうジンクスが流行ったこともあった気がする。これは幸先がいいな。

と。益体もないことをつらつらと考える。

「事故があったのは……三十七番倉庫だったかな」

足取り軽く、僕は北に向かって足を進める。静かだ。人の気配はしない。もちろん気配探査能力なんて便利なもの、僕は持っちゃいないから適当だけども。何にせよ邪魔が入らないのは都合がよろしい。入っても、それはそれで都合がいいのだけれど。

海沿い特有のねっとりとした空気をかき分けて、僕はそこにたどり着いた。

そこで僕が感じたものは。

昨日と同じ。

取り除けない違和。

もしくは期待。

「面白いな。うん、面白い。いや、参ったのかな？　うん、参った」

こぼれたのは意味をなさない呟き。知らず、口が笑みの形に歪んでいた。

どうやら僕は、興奮しているらしい。

屋根は一部吹き飛び壁も半分以上崩れ落ちた、ただの倉庫。広さは十メートル四方といったところ。天井までの高さは五メートルほどだろうか。もっともその天井はすでに役目を成さなくなっているのだけど。壁も天井も鉄筋コンクリート製なのだから、ここで起きた爆発というのは中々に大きなものだったのかもしれない。

いずれにせよ今となってはタダのガラクタの集まり。

そんな何でもない倉庫跡が、僕は気になってしょうがなかった。

立ち入り禁止のテープを踏み越えて、崩れ落ちた壁の隙間から中に侵入する。床に散らばっている炭化したガラクタを踏みつけ、周

辺を観察する。穴の開いた屋根から壁から入り込んでくる日の光で、視界は明るく照らされている。
「……何もないな」
そこは正しく焼け跡だった。
一通りあたりを調べまわってみても、不自然なものは何も見つからない。と言うか、倉庫の爆発後にあったら不自然な何か、なんて僕には判別することはできないのだ。そもそもが素人の僕に、探偵やら警察の真似事ができるはずもない。
だからまあ、こういう時に何を頼りにするかなんて始めから決まっているわけで。
「この辺りに何かありそうな気がするな……」
その答えは勘だ。こういう場面での僕の勘は、今まで外れたことがないのだ。
近くに転がっていた長さ一メートルほどのバールのようなものを拾い上げ、怪しそうな場所を選び、崩れかけた床のコンクリートをはがしていく。
意外な重労働に、すぐ汗が噴き出した。六月の陽気に海からの湿気が入り混じって、肌にまとわりつく。不快を通り越して愉快になってくる。
「あー……久々に、体を、動かしたら、疲れるな、これ」
息が切れる。汗が一滴、二滴。顎から額から流れ落ちて、床に黒い点がしみ込んでいく。それでも崩し続けて掘り続けて。
どのくらい経っただろうか。我に返ってみれば崩れた壁から射し込む日の光が黄色から朱色に変わり始めていて。
ガキン。と、鉄パイプの先が何かを捕えた。
「……」
そのままバールのようなものを放り捨て、素手で慎重に周りの粉々になったコンクリート片をどけていく。
「これは……あたりかな」
はたして僕の目に飛び込んできたのは、金属製の地下へと続く扉

だった。そしてその隣には意味ありげな十個のボタン。これは暗証番号を入力しろってことだろうか。
ありきたり。
つまらない。
もちろん正しい番号なんて僕には分からない。何ケタの番号を入れればいいのかすら分からないんだ。普通ならば間違いなくここでギブアップ。
普通なら。
僕じゃなければ。
だけど残念。
ここにいるのは僕なのだ。
昨日は偶然行き倒れを拾った。
今日は偶然紛れ込んだキャストから、偶然三日前の事故の話を聞いた。
そして今、偶然掘り始めた床下に隠し扉が現れた。
ここで僕が適当に番号を入力したとして、偶然それが正しい番号になる。そんなことはありえないなんて、一体誰が言える？
答えは簡単。
誰にも言えない。
目をつぶって七回、適当にボタンを押しこんでやると、小さなモーター音を響かせて地下への扉が開いて、
「……これは、中々……」
そしてそこには真っ暗闇へと続く下りの階段があった。
同時に。
かすかに。
覚えのある匂いが漂ってきて。
僕は笑った。
そっと笑った。
「だけどこう暗くっちゃ、何にも見えやしないな」
自動でこの扉が開いたからには電気系は生きているんだと思うけ

ど、どうやったらスイッチオンできるかは不明だ。
「仕方ない」
僕はポケットから携帯端末を取り出すと、手早く操作。背面のＬＥＤからライトを照らしだした。持っててよかった携帯端末。
そこで一息深呼吸して、最後にあたりを見回し、
「よしっ」
僕は頼りない端末からの光を手に、地下へと足を踏み入れた。
階段は十秒弱で降り終わり、その先には幅二メートルほどの通路が奥へと続いていた。地下だから涼しいかとも思ったが全くそんなことはなくて、むしろ熱がこもって地上よりも暑いくらいだった。天井の高さは二メートル強。壁は金属特有の冷たさを持っている。降りてすぐ向かって右側に扉があった。
開けてみると、そこはどうやら仮眠室のようだった。ベッドが二台と小さな冷蔵庫の中にちょっとした水と食料。そんな狭い部屋だった。
一見して何もないし、それに多分ここは違う。
おざなりにグルリと見回した後、部屋を出る。仮眠室なんかに構っている暇はない。
この暗い地下には何かある。
僕の中でそれはもう決定事項だった。
この部屋に何もないのだから、それなら奥へ行くしかない。
行こう。端末の充電量も気になるのだ。
奥へ奥へと廊下を歩いていく。革靴と床の奏でる音が反響して、まるで闇の向こうで誰かが咳き込んでいるかのように聞こえた。
僕がまだ海月の家にいた時の話だ。僕の実家は『海月』の中でもかなり中心に近い位置にある家で、だから幼少期に自由になる時間なんてほとんどなかった。全く無駄なことだっていうのに、毎日毎日知識を詰め込ませられて、体を痛めつけられて。そんな日々の中で兄がどこからかある携帯ゲームを仕入れてきた。僕には兄が一人と姉が一人、いや、二人だったかな？　まあ、とにかく兄と姉がい

て。彼らにとって、隠れてそのゲームで遊ぶのはずいぶんと刺激的だったらしい。まるで大冒険でもしているかのように、夜な夜な布団の暗がりの中でその携帯ゲームに夢中になっていた。

そんな光景が、ふと頭の片隅をよぎった。

だから何だといわれても困るけども。

どうして今そんな話をするんだと聞かれても困るけども。

まあ、要するにただの雑話。

下らない話だ。

途中で二回ほど直角に右折して、そうして二十秒ほど歩くと行き止まりに突き当たった。

「……」

右側を見ると、扉があった。

地下への自動扉を開いた瞬間漂ってきたあの匂いが、強くなった。

気がした。

予感。

この向こうにあるものはきっと、

そんな予感。

「……」

だけど僕は躊躇しなかった。左手に持っている端末の電池容量が、赤く点滅しているのが見えたからだ。

そして僕は扉を開いた。

感じたのは、

よどんだ空気。

死臭。

羽音。

酸っぱい唾液。

赤黒く染まった壁がライトに映し出された。

五芒星、中央神殿のシンボルが真っ二つになって床に転がっていた。

たくさんのハエと、それ以上の数の蛆虫がせっせと栄養を蓄えて

いた。
真ん中に、バラバラの肉片があった。
少なくとも二人分のバラ肉があった。
「こりゃひどい」
僕は鼻をつまんでそのまま扉を閉じた。

地上へ戻った僕は地下への入り口の隠ぺい工作を済ませた後、まず初めに携帯端末を取り出し電話をかけることにした。
今日はもう地下へ降りるつもりはなかった。あの部屋を詳しく知らべるためには、しっかりしたマスクが絶対に必要だ。日々の食事を美味しく食べたいと思う感性は、ちゃんと僕にも備わっているのだ。
通話ボタンを押し、ワンコールの途中で相手につながる。
『はい、海月ですが』
今度は義兄の方が出た。
「僕だけど」
『ヨウか。用事は終わったのかい？』
何やら機嫌がいい。彼、ニクソン・ランフォートは普段よりも三割ほどテンションが高めだった。何があったのか気にならないでもないが、それよりもこっちの用件が先だ。
「終わってはいないけど、一時中断。ちょっとやむにやまれぬ事情ができたんだよ」
もちろん事情とは悪臭のことだ。
『？　何かあったのかい？』
「あったんだよ。……死体が」
『なっ……！』
さすがに絶句したようで、珍しく息を呑む音が聞こえる。
『詳しく、聞かせてくれるかい？　いや、それより今どこに？　今危険はないのか？』
次の瞬間には矢継ぎ早に質問をぶつけてきた。

「あー、詳しくは後で説明するよ。とりあえず僕自身に危険はないから大丈夫。今は湾岸工業区の三十七番倉庫付近にいる。死体の匂いが体についちゃったから、着替えを持って迎えに来てほしいんだ」
正直このままの状態で街中へ出たら、今晩は警察署ですごす羽目になるだろう。それは御免こうむる。
電話向こうでは僕に当面の危険がないことが分かって安心したのか、大きく吐息をついていた。
『分かったよ。湾岸工業地区の三十七番倉庫だね。それじゃ十五分ほどで着くから――』
「ちょっと待って」
そのまま電話を切りかけたニクソンを引き留める。
「昨日の彼女だけど、目を覚ました？」
それはちょっとした確認のつもりだったが、それに対する彼の反応は予想以上に大きかった。
『アハハハハハ！』と大きな笑い声が聞こえ、僕は何だ何だと身構える。ニクソンの笑い声なんて、三年以上同居している僕も聞いたことがなかったのだ。
ひとしきり笑った後、まだ笑い足りぬとばかりに声を上ずらせて、『それが聞いてくれ。目を覚ました彼女は何て言ったと思う？　彼女、自分のことを――』
そこで『ピー』という電子音が右耳から通り抜け、携帯端末はそれっきり沈黙した。
電池切れだ。
「……なんてところで切れるんだ」
映画の予告編じゃあるまいし。
さすがに気分を悪くして、僕はその場に腰を下ろした。
まあいい。とりあえず場所は伝えられたんだから、ここで十五分ほども待ってりゃ大丈夫だろう。
もう日はほとんど沈みかけており、西の空は朱と紫のグラデーションに彩られている。日中より少し冷えた潮風が海から流れてきて、

熱のこもった体を気持ちよく冷やしてくれた。うつらうつらと瞼が下りてくる。考えてみれば昨日もほとんど眠っていないのだ。しかも時間は夕暮れ時。眠くならないはずがない。
この際だから下の仮眠室を使ってやろうか、と寝ぼけた頭でそこまで考えた時ふと頭に浮かんできた言葉。
夕暮れ時。
昼が終わり、夜が始まる時。
黄昏時。
人の時間が終わり、魔の時間が始まる時
逢魔が、時。

ジャリ、

と後ろでガラクタを踏みしめる音が聞こえた。
ナニカ、いる。
後ろに
ナニカ。
僕は。
この世界に『海月葉』として生を受けておそらく初めて、僕の体はぶるりと震えた。
爪先からじわりじわりと液体窒素につけられていくような感覚。後ろから伸びてきた影が、黒々と僕の足元で揺れているのが目の端に映った。汗が一気に温度を下げて体の熱を奪っていく。全身の毛穴が、酸素を求めるかのようにぱっくりと開いた。
「……」
言葉は出ない。
僕も、後ろのダレカも、一言も発さない。
いつの間にか液体窒素は胸元まで迫ってきており、もう二、三秒もすれば頭のてっぺんまでカチコチに凍りつかされるように思われた。

体が。
震えて。
ピクリとも――
肩をすくめて、僕は振り向いた。
後ろには鬼がいた。
と、思った。
鉛色の髪をオールバックにまとめ、ダークグレイのスーツを着た。
気味悪いほど青白い肌に、八つ裂きにされそうな鋭い目をした。
人間にしか見えない、今まで見たどんな魔よりも禍々しい。
鬼がいた。
「よう、ニンゲン。お前、ここでなにしてたんだ？」
ニヤリ、と引き裂かれそうな笑みを浮かべて鬼が言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4634z/

二千九百九十九番目の物語

2011年12月17日21時46分発行